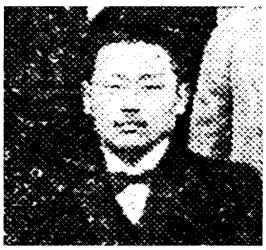
堤康次郎の青年期と転機の回路（下）

――出版業から土地開発業への転回をひもとく――

内海　孝

はじめに（前号）
一　早稲田大学入学直前の康次郎（前号）
二　早稲田大学時代の康次郎（前号）
三　卒業直後の康次郎と著作と編集活動（前号）
四　早稲田派の選挙運動と雑誌『新日本』の経営（本号）
おわりに（本号）
注（本号）
英文要旨（本号）



康次郎の新日本社長時代
（『新日本』1917 年 1 月号，1 ページによる）

四　早稲田派の選挙運動と雑誌『新日本』の経営
――出版業の本格化とそこからの脱却をこころみて――

康次郎は 1914 年 12 月ごろから，公民同盟会の出版業務として「公民同盟叢書」を立ちあげたのをうけて，編集作業にあけくれた．

翌 15 年の 1 月 25 日に，最初の編纂物である第 1 巻と第 2 巻を二冊同時に刊行したことは当時の出版活動への意気込みと選挙がらみの思惑とがつたわってくる．だが，2 月 20 日に第三巻を出版すると，6 月末の第四巻までは空白がつづく（表 4 参照）．それは，来る第 12 回総選挙（3 月 25 日）に向けて，康次郎をはじめ早稲田派（大隈伯後援会）の選挙運動に忙殺されたからである．

その忙しい合間の 2 月 12 日に，康次郎は「日露関係に研究する所深き人」として，国防義会の講演会に呼ばれ，当時の「欧州の大戦」情勢にたいして日本はどのように対処すべきかを講演した．演題「支那の将来と日露の関係」にいう（注 51）．

> 予は日英同盟の価値を無みするものに非ず，然れども，今直ちに日露の衝突を惹起して迄日英同盟を締結すべしとは思はず，斯くの如きは情誼に反するやも知るべからず，然れどり［ママ］国と国との関係は個人の関係と異り，寧ろ情誼の関係に非ずして実に利益の関

係なり．

露国を援けて地中海に向はしむべきか，英国と親しんで満洲を防ぐべきか，是れ我が国家最高の政策として，朝野の等しく考究せんことを要望するもの也．

康次郎はこの演説のなかで，先の12月解散の原因であった「彼の増師問題」にも言及して，質疑論議が「僅に一年の延期非延期を論ずるのみ」で，いかに「財政を調和せる軍備をなすべき」かの「根本条件に触れざる」を「深く遺憾」とするとのべ，暗に政友会と国民党のありようを批判した．来る総選挙への前哨戦ははじまりつつあった．

第二次大隈内閣が成立するや，早稲田派は14年6月17日，大隈伯後援会を発起していたが，この期に及んで，大隈伯後援会全国大会が15年1月18日，大隈邸でひらかれた．その席上，早稲田大学雄弁会出身者が当面の問題として現内閣を擁護するために「大隈伯後援会遊説部」を組織することを発表した（注52）．

しかも，都下各大学出身者からなる青年団体「丁未倶楽部」も，非政友の気勢をあげ，大隈伯後援会遊説部の主張と「異なる所なきを以て」，ともに相提携することに決した．そこで，遊説部としては丁未倶楽部の応援をえて，現内閣与党候補者を声援することにした．

いっぽう雑誌『新日本』では，15年2月号を「総選挙号」と名づけて特集記事を組む．大隈重信の巻頭論文「解散に臨んで国民に訴ふ」の余白に，15年1月付の「大隈伯後援会宣言」を掲載し，いまや「国民的神経中枢の一大病患」を「救療」するがために立つ「近八旬の老躯」大隈への支持を訴えた（注53）．

永井柳太郎はその同じ号で，論考「「新日本」の檄」を書く．大隈は「八旬に近く，隻脚」杖によらなければ歩くことが「頗る難し」という状態のなかで，何を「貪る所」があろうか．ただ「官僚，政党多年の弊風を一新して，立憲の大義を確立せんがためのみ」と揚言して，舌鋒の矛先を転じつぎのように立憲政友会を論難した（注54）．

憲政を蹂躙し，君国を犠牲として憚からざる政友会が，能く議会の多数党たりしは何故ぞ．之れ彼等が中央に於ては，議会の多数党たるを好餌として，或は官僚を誘惑し，或は官僚を恐喝し，以て其間に利祿を収むるを常としたるが如く，地方に於ては，地方の利害問題を好餌として，或は地方民を誘惑し，或は地方民を恐喝し，以て多数の投票を誅求したるの致す所のみ．即ち彼等は地方民に対し，政友会より議員を選出せんか，之に報ゆるに鉄道の布設，道路の修理，橋梁の架設，堤防の築造，学校の建設等を以てすべしと雖，若し反対党に款を通ずるに於ては，其地方に於ける此等の設計に反対し，一切の改良を妨害すべしと云ふ．

（中略）

政友会の積極的政策と称するが如きものも亦，之れ国民を誘惑する一種の手段のみ．政友会は大隈内閣の非募債方針を攻撃し，盛に外債を募集して，之を有力なる生産事業に投ぜんことを主張すと雖，然かも如斯きは不可能を以て国民を煽動する者なり．

このようにして，永井が政友会の「積極的政策」を攻撃し，大隈内閣の「非募債」消極政策を主張する論拠と方針のもとで（国民党への非難もあることはあったが），早稲田派＝大隈伯後援会の選挙活動は開始された．康次郎も，大隈伯後援会の発起人会のひとりとして参加していたので（注 55），遊説弁士として各地の選挙区に出かけ活動したことが表 5 にあらわれている．

表 5　大隈伯後援会遊説部における堤康次郎（1915 年 2〜3 月）

大挙遊説部（第四区　近畿，山陰道）

弁士（青柳篤恒　二木保幾　堤康次郎　宮澤胤勇）

	開会地	康次郎演題	典拠
1915.2.22	岐　阜	（不明）	名古屋新聞 新愛知
2.23	彦　根	（不明）	京都日出新聞 15.2.23
2.23	大　津	（名前のみ）	京都日出新聞 15.2.23
2.24	奈　良	（不明）	新有田 紀伊新報 伊勢新聞
2.25	和歌山	（名前のみ）	紀伊新報 15.2.27
2.26	大　阪	二箇の亡国策	大阪朝日新聞 15.2.27
2.27	京　都	（名前のみ）	京都日出新聞 15.2.27
2.28	豊　岡	大なる抱負	神戸又新日報 15.3.2
3.1	鳥　取	高遠の理想	因伯時報 15.3.3
3.2	米　子	経綸なき政友会	山陰日日新聞 15.3.4
3.3	松　江	寂れ行く多数党	山陰新聞 15.3.4＊
（計）11 回		＊＊宮澤は大阪と京都の二ヶ所のみ参加	

個人応援部（2.20~3.25）

	応援候補者	応援回数	他の応援者
1	上島長久（奈良郡部，新隈）	5	永井柳太郎 1
2	蔵原惟廓（東京市部，前同）	1	五明忠一郎 5
3	守屋此助（東京郡部，前同）	5	菊池哲春 1 神田寅之助 1 大井静夫 2
4	西田庄助（滋賀郡部，新隈）	20	杉山重義 1 永井柳太郎 5
	（計）	31	

備考　『新日本』第 5 巻第 5 号，49~56 ページによる．康次郎の演題については典拠の新聞資料によるが，記載がなかった場合でも調査新聞は掲げた．＊の原文演題は「寂れ行多く数党」とあるが，引用者が誤植と判断して訂正し「寂れ行く多数党」とした．

表 5 をみると，康次郎は「大挙遊説部」の弁士としてばかりでなく，「個人応援部」の弁士としても精力的に活動していたことがわかる．前者の大挙遊説部はあたかも早稲田大学雄弁会

の地方巡回演説会のように，全国を6区にわけた一区ごとに，4人一組で遊説するものであった．

第1区（東北，北海道），第2区（北陸道），第3区（東海道，甲信地方），第4区（近畿，山陰道），第5区（山陽道，四国），第6区（九州）で，そのうち康次郎が第4区を担当，永井柳太郎は第3区を五明忠一郎らとともに遊説した．

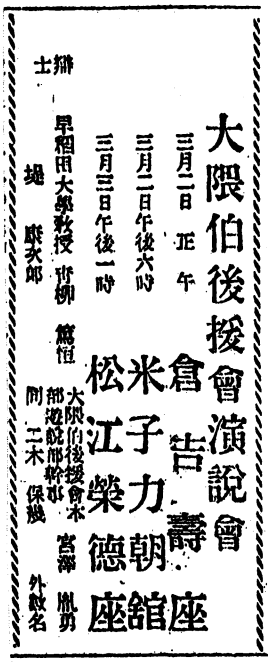
表5のなかで，康次郎の演説内容がいくらか判明するのは，(1) 2月26日の「二個の亡国策」，(2) 3月1日の「高遠の理想」である．前者が「対独戦争に対する政友会の大岡，松田両氏の相反したる外交上の無識が亡国の二策なることを痛罵するの熱弁を振」ったというのにたいして（注56），後者「高遠の理想」は「外交上より大隈伯の抱負が極めて高遠なるを説明」したものであった（注57）．

さらにいえば，康次郎の演説ぶりがいっそう明白なのは3月2日の，米子での演説会である．当時の状況と雰囲気が臨場感をともなってうかがえるので，報道箇所全文をあえてかかげたい（注58）．

> 大隈伯後援会本部特派員早稲田大学教授青柳篤恒氏一行の大演説会は，一昨二日午後七時より米子町朝日町力朝館に於て開催せられたり，折しも非政友熱勃興し，此挙の一日たりとも早からん事を熱望してありける聴衆は，午後五時を過ぐる頃より犇々と押し懸けたるが，奈何にせん会場の狭隘なりし為め，開会前既に木戸止めを為すの止むなきに至りたるは返す〳〵も遺憾なりき，斯くて杵村直三郎氏は開会の辞に併せ，敵を滅ぼさんとする吾人は常盤御前の如きものにして一時操を売るとも其目的を達せざる可からずと説き起し，吾人は此際政友会を滅すべく極力応援を為さざる可からずと論じて降壇するや，校友船越作一郎氏は『大隈伯を試験する好機』と題し，快弁滔々隈伯後援会の趣旨を大呼し，破れん許りの拍手を浴つゝ壇を降るや，隈伯後援会幹事堤康次郎氏続いて登壇，『経綸なき政友会』てふ演題の下に辛辣なる弁舌を振ひ巧妙なる比喩口を突いて出で，殆ど聴衆を魅せしむ，亜で同会幹事二木保幾氏は『局面展開』と題し大隈内閣が非募債消極主義を採れる所以のものを数字的に説明し，併せて外交に至りては之に全々反対なる発展政策を採り，目下日支交渉問題の如きに於ても強硬なる態度を固執しつゝありと述べて隈伯の政策を称揚し，一転して今回の総選挙には苟くも人格と道徳とに欠如せる候補者に対し一票をも投ずる事なく，大谷誠夫氏の如きにその清き一票を投ぜられたしと絶叫して降壇す，最後に青柳篤恒氏雷の如き拍手に迎へられて壇上の人となり『世界に於ける帝国の地位』と題し，去る一日鳥取市戎座に於て為したると同様の演説を試みて降壇したるが，同氏の論鋒[ママ]極めて鋭く，其説く所同氏の最も得意とせる支那問題を主眼とせるを以て聴衆をして

深刻なる感銘を与へしめたり，斯くて午後十時に垂とする頃，杵村氏閉会を宣し，五百に余る聴衆は雪崩を打つて木戸口より吐き出されたり，尚ほ宮澤胤男氏は本部の急電に依り京都より引返し，右演説会には参加せざりき（読点は引用者）

掲載新聞がどちらかといえば非政友系で，その筆力は早稲田派にひいき目であったことを差し引いたとしても，康次郎の演説ぶりは「辛辣なる弁舌を振ひ巧妙なる比喩口を突いて出で，殆ど聴衆を魅せしむ」ところであった．一行が米子に到着し，演説会の事前予告が掲載された紙面には「一行中の宮澤氏を初め堤，二木両氏の共に雄弁会員として東都に鳴つて居る人のみで，真に雄弁で天下を席捲せんとするの猛者揃ひである」と紹介されたほどである（注 59）．


大隈伯後援會演說會
三月二日　正午　倉吉壽座
三月二日午後六時　米子朝舘
三月三日午後一時　松江榮座
大隈伯後援會本部遊說部幹事　宮澤胤男
早稲田大學教授　青柳篤恒
弁士　堤康次郎　二木保幾　外數名

資料 3　堤康次郎「弁士」の新聞広告
備考『山陰日日新聞』1915 年 3 月 2 日，1 面による．

二木保幾が「局面展開」，青柳篤恒が「世界に於ける帝国の地位」という類似演題を一貫して使ったのにくらべ，康次郎は表 5 にあきらかなように毎回，異なった演題を使用したことがわかる．それは早大卒業後の康次郎が，執筆や編集業務をとおして培われた幅広い素養と臨機応変的な対応能力をいかんなく発揮した成果と理解してよいだろう．

兵庫県城崎郡豊岡町の演説会では，同県選挙区立候補者で校友の齊藤隆夫（立憲同志会）が「大隈内閣の使命」と題し，康次郎らの後で演説したように（注 60），今回の大隈伯後援会演

説会は非政友と大隈内閣与党候補者を声援したのである．

米子をへて，松江での演説会をおえた康次郎と二木保幾は帰途，松江市選挙区の無所属で新人候補者渡部龍一郎派の白潟選挙事務所参謀のひとりを訪問し，同氏の子息が早稲田大学に「在学中の縁故」をもって大隈伯後援会に加入するよう「勧誘」したが，「断然」と拒絶されてしまったという（注61）．

各地を遊説しつつ，早稲田人脈を「縁故」にして，このような大隈伯後援会への勧誘も遂行し，それは選挙活動の一環としても組みこまれていたのであろう．

ところで，表5でとくに気づくことは康次郎の個人応援部における故郷，滋賀県選挙区での新人候補者で大隈伯後援会候補者西田庄助への突出した応援ぶりである．定員5人のところ7人が立候補し，そのうち元議員が5人（国民2，政友2，中正1），前議員が1人（国民1）で，新人候補者は西田ひとりであった（注62）．しかも，西田は康次郎の地元，彦根町に選挙事務所をかまえ（注63），大隈伯後援会幹事康次郎にとっても，負けられない激戦区の一戦であったといえよう．

この滋賀県選挙戦は，さいわいにも，新人の西田庄助が最高点で当選をはたし，康次郎の胸中にもいかばかりかの想いと地元選挙への感慨が沸きたったことであろうか．

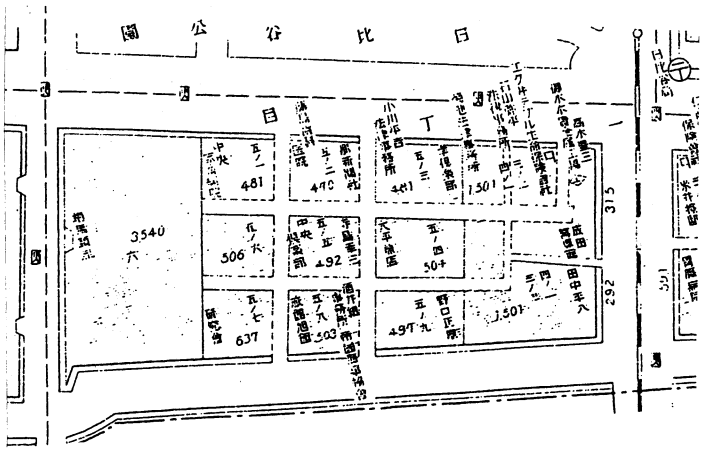
だが，西田庄助のつぎに応援に重きをおいたと考えられる奈良県選挙区で新人の大隈伯後援会候補者，『報知新聞』主筆の上島長久が次点で落選したことで，このたびの総選挙は全体としては大隈内閣与党の大勝におわったものの，この選挙戦にかけた康次郎の個人的な達成感としてはいくぶん減退したかもしれない．

総選挙がおわると，康次郎はふたたび公民同盟会の出版部での業務にたずさわる．それは，主として公民同盟叢書のさらなる続編を編纂する作業であった．表4からは，そのようなことが判明するものの，その刊行は順調であるようで，そうでもない印象である．この時以降に作成されたであろう「公民同盟会員募集」によると，本会員は公民同盟叢書を平均（「毎月二冊の割合」（一年で24冊）で配付されることになっていたことからすれば（叢書第11巻附録），刊行は思うようには進展しなかった．

その原因がどこにあったのかはわからない．ただ，この時期，公民同盟出版部としては叢書だけでなく，一般の出版物もてがけるようになった．久米邦武『裏日本』（1915年11月），島谷亮輔『現代米国外交論』（16年2月），長澤倉吉『新極東主義』（16年4月），カール・ヘルフエリッヒ著，永井柳太郎訳『独逸富国論』（16年7月），いずれも，外国人をのぞき早稲田大学の教員か関係者である（長澤は衆議院議員で1908年商科卒）．

16年初頭と思われるが，公民同盟出版部の事務所は従来の豊多摩郡渋谷町下渋谷（康次郎自宅）から，官庁ビジネス中心街の麹町区内幸町一丁目5番地（日比谷公園南端向いがわ）に

移転した（資料 4 参照）．その意味では，康次郎の出版編集業務は 1915 年下半期，大戦景気と大隈内閣人気にささえられ，本業として本格的に認識されはじめた．出版業という知的な事業が，康次郎の事業分野に明確なかたちをもって登場したといえる．



資料 4　麹町区内幸町一丁目 5 番地

備考　『東京市及接続郡部地籍地図』東京市区調査会，1912 年（『地籍台帳・地籍地図〔東京〕』第五巻）．
内幸町一丁目 5 番地はさらに 1～9 号に分れていた．図左手は内幸町二丁目で貴族院，衆議院があった．

それは，翌年（1916）11 月の『大正五年早稲田大学校友会名簿』のみずからの職業欄に康次郎が「出版業，千代田護謨会社専務取締役」と卒業直後最初に報告したように（注 64），康次郎にとって「出版業」は，学生時代からの一攫千金的な利殖活動とはちがって，地道に築きあげてきたはじめての正業としてあったと理解することができる．

このような背景と自負心があり，しかも千代田護謨会社の専務取締役に 7 月には就任していたからこそ，康次郎は 1916 年 10 月，大隈や永井からの指名もあったなかで，経営が「困難」といわれた雑誌『新日本』の編纂と経営を冨山房から一手にひきうけた（注 65）．それゆえ，1917 年 11 月の『大正六年早稲田大学校友会名簿』にいたっても，前年と同じように「新日本社長，千代田護謨会社専務取締役」と出版業の職業を先に記載したことにもあらわれている（注 66）．

1916 年 10 月の冨山房と康次郎との経営譲渡「覚」の締結をうけ，直後の『新日本』12 月号は社告「本誌の大発展と新日本社の創設」を掲載した．その冒頭にいう（注 67）．

大抱負の実現には大組織を伴はざる可からず，我大隈侯は卓落の英質に満腔の経綸を蔵し，今や野に下りて是より社会教育に献身せんと欲せらるる一面に，幸か不幸か冨山房の商運

日に隆昌にして出版事業の益多端なる，兼営にては雑誌新日本の為に其力を専にする能はざる憾あり，顧れば弊誌は創刊以来已に五星霜を閲し，我侯爵主宰の下に基礎既に内に固く信用外に遍しと雖も，而かも此の如きを以てしては将来永く我侯の大希望に副ふ者に非るべきを顧慮し，茲に第二次の発展を謀りて独立自営の新組織に想到し遂に新日本社を創設して法学博士高田早苗，冨山房社長阪本嘉治馬両氏を顧問に仰ぎ，其経営を全部堤康次郎氏に委ねて大々的発展を図るに決し来る大正六年正月発行の新年附録号より，我新日本は佳人の春粧を凝し，日頃愛顧を受けつゝある読者の前に満面の嬌艶を誇らんと欲す，

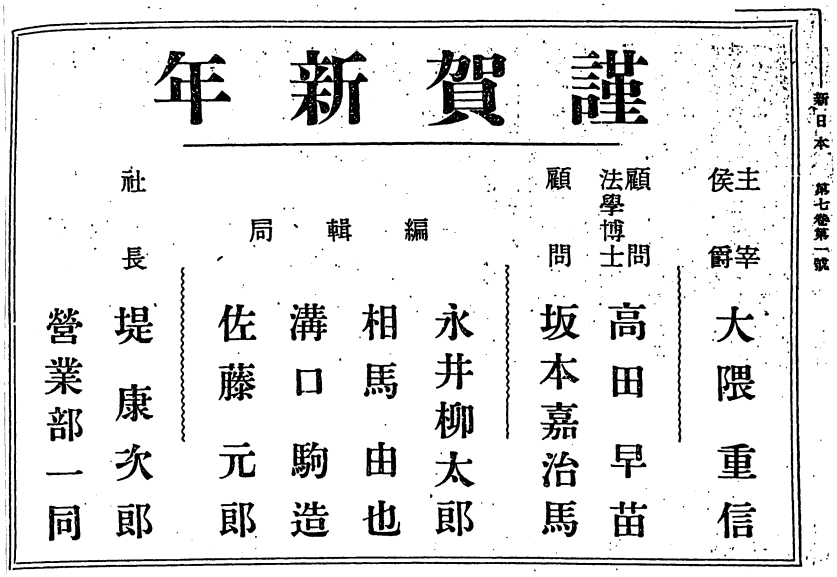
この社告によれば，つぎのことがわかる．すなわち，(1)『新日本』の主宰者大隈は下野したのにともなって（16年10月5日），今後は「社会教育に献身」しようとの「大抱負」を抱いている．(2) ところが，『新日本』の編集と経営をになっている冨山房は「商運」が日ごとに「隆昌」して，出版事業もますます「多端」となっているので，大隈の「大抱負」「大希望」を実現させるために『新日本』にだけ全力をささげることができない．

(3) そこで，出版社の「兼営」ではなく，いわば専業として『新日本』を「独立自営の新組織」に変更して維持，それを契機に「第二の発展」をはかることにし，その受け皿として「新日本社」を創設した．(4) その経営の「全部」を康次郎に委ね，「大々的発展」をはかる．顧問には高田早苗，阪本嘉治馬（冨山房社長）が就く，というものである．

雑誌『新日本』は社告でも言及しているように，1911年4月3日の創刊以来「五星霜」をへたが（表6参照），来る1917年1月からは新しい社長康次郎のもとで再出発することになった．それは，新会社「新日本社」として発足させ，雑誌『新日本』を「第二の発展」期にすると位置づけられたのである．この新事態にともなって，従来の公民同盟出版部は新会社に吸収合併された．

資料5　『新日本』の新体制（1917年1月）

備考　『新日本』1917年1月号，1ページ．前列中央は大隈重信，向ってその右から堤康次郎，溝口駒造，佐藤元郎，大隈の向って左から永井柳太郎，相馬由也である．


謹賀新年

侯爵 大隈重信
主宰

顧問 法學博士 高田早苗
顧問 坂本嘉治馬

編輯局
永井柳太郎
相馬由也
溝口駒造
佐藤元郎

社長 堤康次郎
營業部一同

新日本 第七卷第一號

資料 6　堤康次郎の新日本社長就任草々の「謹賀新年」あいさつ
備考　『新日本』1917 年 1 月号，126 ページ.

表 6　雑誌『新日本』（1911 年 4 月―1918 年 12 月）

巻号	年月日	ページ数	特記事項(特集，＊は論文，［　］は引用者注)
1-1	11/4/3	182p	発行所/冨山房，編集兼発行者/楠山正雄，印刷所/日清印刷，表紙絵/和田英作
1-2	5/1	178p	
1-3	6/1	176p	
1-4	7/1	176p	
1-5	8/1	176p	
1-6	9/1	176p	
1-7	10/1	176p	
1-8	10/15	300p	アメリカ号
1-9	11/1	176p	
1-10	12/1	176p	
2-1	12/1/1	216p	
2-2	2/1	176p	
2-3	3/1	176p	＊永井柳太郎「白禍論」
2-4	4/1	272p	創刊一周年紀念号　紀念附録明治五十年
2-5	5/1	176p	
2-6	6/1	176p	＊永井柳太郎「拓植局廃すべからず」
2-7	7/1	176p	
2-8	8/1	176p	
2-9	9/1	360p	明治聖代号
2-10	10/1	192p	大喪儀記念号
2-11	11/1	176p	
2-12	12/1	176p	
3-1	13/1/1	280p	新年附録世界十六大帝　＊永井柳太郎「大正維新論」

巻号	年月日	ページ数	特記事項(特集，＊は論文，[　] は引用者注)
3-2	2/1	176p	
3-3	3/1	176p	
3-4	4/1	272p	附録民権史上の十二名士
3-5	5/1	176p	
3-6	6/1	176p	独逸皇帝即位二十五年記念
3-7	7/1	176p	
3-8	8/1	176p	＊永井柳太郎「東洋拓殖会社撲滅論（其一)」(「其五」までつづく)
3-9	9/1	176p	懸賞論文発表「日米問題の根本的解決方法如何？」
3-10	10/1	176p	
3-11	10/15	352p	世界民族号（秋季増刊）
3-12	11/1	176p	
3-13	12/1	176p	
4-1	14/1/1	272p	文芸附録
4-2	2/1	176p	
4-3	3/1	176p	(「当局の忌諱に触れて」発売禁止，早大中央図書館所蔵)
4-4			(発売禁止，未見)
4-5	4/3	280p	創刊三周年記念号（臨時増刊）附録百人一話　[4/13 大隈組閣命令]
4-6	5/1	176p	＊大隈重信「出陣に臨んで天下に宣す」表紙変更/大隈の写真表紙はじまる（従来は絵）
4-7	6/1	176p	昭憲皇太后御大喪儀紀念大附録
4-8	7/1	176p	
4-9	8/1	176p	
4-10	9/1	280p	全欧戦乱と欧州現代思潮（秋季特別号）
4-11	9/15	64p	大戦写真画報（九月増刊）　[国会図書館所蔵四版]
4-12	10/1	176p	
4-13	11/1	176p	
4-14	12/1	176p	
5-1	15/1/1	272p	特別附録二十世紀十五年史
5-2	2/1	172p	総選挙号　＊永井柳太郎「「新日本」の檄」
5-3	3/1	176p	大隈内閣号　＊高田早苗「早稲田大学に対する世の誤解を解く」
5-4	4/1	256p	四週年記念文芸附録
5-5	5/1	176p	
5-6	6/1	176p	＊永井柳太郎「訴ふる能はざるものに代りて訴ふ（其一)」
5-7	7/1	176p	＊永井柳太郎「訴ふる能はざるものに代りて訴ふ（其二)」
5-8	8/1	176p	＊永井柳太郎「「訴ふる能はざる者に代りて訴ふ」の論文を中止するに就きて」(「其筋より警告」継続は発売を「中止」と)
5-9	9/1	176p	
5-10	10/1	176p	
5-11	11/1	392p	御即位記念大正聖代号
5-12	12/1	178p	御大礼記念号
6-1	16/1/1	276p	
6-2	2/1	176p	
6-3	3/1	176p	
6-4	4/1	266p	第五週年記念号　＊岡本米蔵「将に起らんとする土地熱と最も見込ある米国の土地購入」
6-5	5/1	176p	
6-6	6/1	176p	
6-7	7/1	176p	
6-8	8/1	176p	
6-9	9/1	176p	露国研究［小特集］

巻号	年月日	ページ数	特記事項(特集，＊は論文，［　］は引用者注)
6-10	10/1	276p	新日本膨脹号　＊大隈重信「文化的膨張論」　［10/5 大隈内閣総辞職］
6-11	11/1	176p	
6-12	12/1	176p	大隈の写真表紙最後（次号よりは絵に変更）社告「本誌の大発展と新日本社の創設」（其経営を全部堤康次郎氏に委ねて大々的発展を図るに決し）＊野澤源次郎「株式熱より土地熱へ」　＊神田駿吉「田園都市問題」
7-1	17/1/1	126p	巻頭に大隈と堤社長らが並んだ新体制口絵写真（本稿の冒頭ページ参照）発行所変更／新日本社　編集兼発行人変更/佐藤元郎
7-2	2/1	168p	
7-3	3/1	168p	印刷所変更/秀英舎　＊澤柳政太郎「文化的汎亜細亜主義を提唱す」
7-4	4/1	208p	春季大附録号　岡本一平漫画 150 葉［最大］
7-5	5/1	168p	表紙裏の広告変更/書籍広告から「建物興産合資会社」へ
7-6	6/1	159p	通しページを分野別ページに変更
7-7	7/1	159p	＊らいてう「伊藤野枝さんの歩かれた道」（次号につづく）
7-8	8/1	167p	編集兼発行人変更/北昌
7-9	9/1	162p	印刷所変更/報文社　外交社合併（外交欄新設予告）
7-10	9/22	333p	化学工業号（臨時増刊）社告「根本的に其内容を一新」　編集兼発行人変更/上林基樹
7-11	10/1	160p	謹呈（大隈「御病気」にて「御執筆相成り難く」）
7-12	11/1	164p	相馬由也（大隈の主筆辞任と「進退を共にし」辞す）　＊伊藤重治郎「本邦私学難問の代表としての早大紛擾」
7-13	12/1	164p	（発売禁止，東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵）
8-1	18/1/1	208p	発行所住所変更/市外落合村下落合五百七十五番地（「都合に依り」）　目次裏に「前月号発売禁止」と印刷
8-2	2/1	158p	
8-3	3/1	160p	大隈論文の再開（掲載最後）
8-4	4/1	164p	
8-5	5/1	166p	永井論文の掲載最後
8-6	6/1	162p	
8-7	7/1	151p	＊長門三郎「新江州商人の代表者」
8-8	8/1	170p	＊無署名「避暑地としての軽井沢」
8-9	9/1	156p	編集の後（来月号から内容も体裁も「全く刷新」と予告）　＊音羽九郎「屠龍の枝，博虎の略」
8-10	10/1	206p	革新号　版型縮小化（菊判）　［国会図書館所蔵］
8-11	11/1	204p	表紙変更（文字のみに）印刷所変更/大成社　＊山川均「軍服の政治よりフロックコートの政治」
8-12	12/1	198p	編集の後（新年号で「新年の異彩を放つべく準備中」と予告）

備考　雑誌『新日本』の創刊号（1911 年 4 月号），口絵のなかの「『新日本』編輯顧問会議」（ページ数欠）で，雑誌名『新日本』にたいして「しんにほん」とルビをつけた．ところが，翌年の 2 巻 4 号（12 年 4 月号）の裏表紙から，従来の日本語タイトルに代わって英文タイトルが入りはじめたところ，その英文表記は“Shin Nippon”とされ，終刊までそれが継続される．

雑誌『新日本』は，表 6 のように展開した（注 68）．表には表記することができなかったことを含めて，冨山房経営時代と康次郎社長時代との比較のなかで『新日本』誌の特徴的なことをいくつか指摘することにしたい．

（1）主宰者大隈重信は，アメリカの雑誌『アウトルック』が主筆ルーズヴェルトひとりの機関誌でなく「全米国に向つて開かれたる機関」のごとく，将来「真の新日本建設の時代」に

対応できるように「国民一般の為め，その代弁者たる可き機関」として『新日本』を発刊したとはいえ（注69），大隈は毎号のように巻頭論文を掲載した．

その意味では，『新日本』は“大隈さんの雑誌”と呼ぶにふさわしい実態をともなっていたといえる．それは表7と表8にあきらかである．だが，康次郎社長時代の後半期になると（17年10月号以降），その傾向は一変せざるをえない状況に追いこまれていった．

(2) 主宰大隈のもとで二人の主筆，永井柳太郎と樋口秀雄が創刊当初から補佐する態勢であった．しかし，後者の樋口は15年3月の総選挙で長野県選挙区から立憲同志会の新人候補者として当選したが，その半年ぐらい前から主筆を降板したと思われる．14年10月の『新日本』紙面から樋口の名前をみいだすことができないからである．このことは，表7の執筆状況に明瞭に示されていよう．

表7　『新日本』全巻の執筆者一覧（上位20人）

		冨山房時代	堤社長時代	(計)
		1~6巻	7~8巻	
1	大隈重信	70	10	80
2	永井柳太郎	63	8	71
3	樋口秀雄＊	35	−	35
4	山口孤剣	24	10	34
5	岡本一平	17	8	25
6	浮田和民	18	2	20
7	安部磯雄	14	5	19
8	田中穂積	16	1	17
9	与謝野晶子	15	1	16
10	神戸正雄	9	6	15
10	新渡戸稲造	5	10	15
12	鎌田榮吉	9	5	14
12	上司小剣	10	4	14
12	島田三郎	13	1	14
15	早川鉄治	8	6	14
15	小川未明	9	4	13
15	後藤新平	9	4	13
15	佐藤舷浪	13	−	13
15	渋澤栄一	12	1	13
15	牧野義智	−	13	13

備考　『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵　雑誌目次総覧』第134巻総合編，大空社，1997年，8～18ページ，および同上書の欠号部分をおぎなって作成．＊は樋口のペンネーム（龍峡）を合算した．

表 8　康次郎社長時代の執筆者一覧（上位 20 人）

		7～8 巻	（1～6 巻）
1	牧野義智	13	−
2	原　月舟	12	−
3	大隈重信	10	71
3	田中貢太郎	10	−
3	山口孤剣	10	24
6	新渡戸稲造	10	5
7	井上辰九郎	8	3
7	岡本一平	8	17
7	清水文之輔	8	−
7	永井柳太郎	8	63
11	青柳有美	7	1
11	生方敏郎	7	4
11	田中鼎一	7	−
14	神戸正雄	6	9
14	早川鉄治	6	8
16	安部磯雄	5	14
16	鎌田榮吉	5	9
16	松崎天民	5	7
16	無名氏	5	1
16	湯原　元	5	−

備考　表 7 に同じ.

(3) 創刊当初の執筆者構成は康次郎社長時代になると，おおきく変貌した．それは表 8 にあらわれ，いままでの“大隈さんの雑誌”からの脱色化が顕著である．牧野義智（明治大学教授），原月舟(俳人)，田中貢太郎，清水文之輔（太陽生命専務取締役）は初登場で，執筆頻度の上位者にあがっているところが特筆される．それは，康次郎が大隈から雑誌の経営を依頼されたときに「雑誌の個性をもっとハッキリ出したい」といったとされるが（注 70），その結果であるとは思えない．

新渡戸稲造も執筆頻度は 10 回で高い．だが，表 8 には頻度数が低いので，上位者となっていないものの，康次郎社長時代のもっとも注目すべき特異な執筆者は山川菊江（4 回），とくに山川均（3 回）である．山川均は，『新日本』終盤の 18 年 10 月号（第 8 巻第 10 月号）で，従来からの匿名の筆名『無名氏』が「山川均」であることを明示して，論考を寄せはじめているので，実際の執筆頻度はさらに高くなる（9 回）．その意味では，山川均は康次郎社長時代の“蔭の主役”であったといわねばならない．

しかも，雑誌『新日本』の最終号では，山川均の論考は巻頭をかざるにいたった．その前号（11 月号）の「編輯の後」（54 ページ）での予告において，山川均の大山郁夫論評が「来月号乃至新年号」で展開されることを謳っていることに注目すれば，康次郎社長時代の『新日本』にとって山川の革新的発信性と重用は，いかに積極的な“看板的な”主張であったかがわかる．

表9 新渡戸稲造と山川均の論題一覧（堤康次郎社長時代）

	新渡戸稲造
1	階級闘争と人道的経済主義（7-12，51-54）
2	血より智，形式より内容への移動（8-1，42-45）
3	世界変局に対する日本現在の三大難局（8-2，＊2-10）
4	民衆の思想抑圧政治主義と日本の精神的破壊時代（8-4，＊2-10）
5	国家的より国際的への政治主義の一大転換運動（8-5，＊2-7）
6	社会主義及民主主義に対する日本の抑圧主義を難す（8-6，＊2-8）
7	日本の戦争に対する犠牲報酬としての講和条件（8-7，＊2-8）
8	民衆を虐ぐる官僚政治の弔鐘（8-9，＊2-8）
9	世界の大勢に順応すべき民本的施設（8-11，40-48）
10	血の擾乱か，名誉革命か（8-12，17-21）
	山川均
1	（無名氏）吉野博士及北教授の民本主義を難す（8-4，45-62）
2	（無名氏）俎上のデモクラシー（8-5，8-20）
3	（無名氏）御用記者の政治論（8-6，9-15）
4	（無名氏）文芸家の理想村（8-7，1-13）
5	（無名氏）デモクラシーの純化（8-8，11-22）
6	（無名氏）民衆と離れた民衆的政論（8-9，9-20）
7	民を本とせざる吉野博士と大山郁夫氏の民本主義（8-10，11-22）
8	軍服の政治よりフロックコートの政治へ（8-11，11-21）
9	休戦！ 講和！ 戦争の感激性と平和主義の悲惨性（8-12，＊2-16）

備考　雑誌『新日本』の堤康次郎社長時代は7-1から8-12まである．本文と目次の論題とがちがう場合は前者にしたがった．論題のつぎの数字は巻号(左)とページ数(右)，＊印は巻頭論文をあらわす．「(無名氏)」の記載は「山川均」の実名を公表する以前の執筆者名で掲載時のものである．

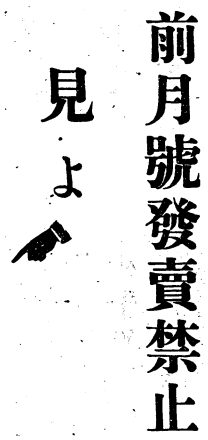
山川均は実名をあげての舌鋒鋭く論じ，急先鋒のペン先が大山郁夫，とりわけ吉野作造の「民本主義」の不徹底と欺瞞性を突いてやまなかった．18年11月号の論考「軍服の政治よりフロックコートの政治へ——『平民政治』の歴史的意義——」で，山川均は政党政治の意義を強く訴えた．ときに，内閣は寺内正毅から原敬の時代へと移りはじめた直後である．

事実，康次郎はかつて山川均と山川菊江に執筆させ，「デモクラシーという言葉を世間に紹介」したので，「俺がデモクラシーの元祖だ」といっていたそうである（注71）．そのとおりであるとは思わないが，康次郎が山川夫妻に執筆の機会を積極的にあたえたのは本当であったといえる．山川夫妻を登用して，起死回生の挽回策を講じたものの，経営的には破産してしまったことが「山川均」登場の直後であったことを考えると，雑誌経営のむずかしさを「しみじみ悟った」と何年たっても康次郎がかたっていたのは興味深い．

(4) と同時に，康次郎社長時代になると，執筆者だけでなく雑誌の増ページ数をうたったが，それは当初だけで，ページ数の不規則化と減少化が特徴となった．さらに18年9月号で編集者の「編集の顔」によれば，来月号から「時代要求」に応じて，雑誌の内容も，体裁も

「全く刷新」，その「面目」をあらためると予告した．実際，その体裁は従来の判型（タテ24.5cm，ヨコ17.8~18.0cm）から縮小サイズ（タテ21.0cm，ヨコ14.0cm~14.1cm）に，三号分だけ移行して終刊した（注72）．

（5）従来，『新日本』の刊行で着目されることがなかったことは，表6で明確にしたように「発売禁止」の処分を3回，当局からうけていたことである．判明するかぎりでは，禁止の警告をうけたのが1回ある．最初の発行禁止処分は14年3月と4月（第4巻3号と4号），2回つづけてのものであった．それは14年1月のシーメンス事件に端を発した海軍収賄問題＝山本内閣糾弾運動を報道した号で，この直後の4月13日，大隈重信に組閣命令が出されたことを考えると，当時の雑誌『新日本』がはたした役割と意義は大きかったといえる．



資料7　「前月号発売禁止」の目次表示
備考『新日本』1918年1月号，目次裏．

3回めの発売禁止処分が康次郎社長時代の17年12月（第7巻13号）で，このときの事由は寺内内閣の失政問題を糾弾する報道であった．いずれの発売禁処分も，政党内閣ではない官僚超然主義内閣の政策的失政を糾弾するところが共通項で，雑誌『新日本』の旗幟と存在価値は鮮明であった．当時の雑誌ジャーナリズム界のなかで，『新日本』は政治的に非官僚超然主義，非政友会で，明治時代以来の“民党”的で立憲的な政治思想を確立し，発展させる方向性をもっていたことがわかる．

つぎに発売禁止の警告を当局からうけて，論考の継続を「中止」せざるをえなかったのは主筆の永井柳太郎である．表6に記したように，それは15年8月のことで，該当論考は二ヶ月前の第5巻6号から連載しはじめた「訴ふる能はざるものに代りて訴ふ」である．それは副題に「植民政策の一大錯誤」と「台湾政庁の人権蹂躙」をかかげ，台湾総督府の政策が「根本的

誤謬」を犯していると糾弾するものであった．だが，ときは大隈内閣時で大隈重信首相への遠慮があって，永井は連載論考の中止を決定したのであろうか．

(6) では，『新日本』は創刊当初から，どのくらいの発行部数を誇ってきたのであろうか．このことは，雑誌の編纂継続と経営状態をみるためには必要な問題である．

表 10　『新日本』創刊当初の部数調

	印刷高	売上数	呈上	差引残高
第一巻第一号	40,000	38,008	1,387	605
第二号	39,000	28,525	1,564	8,911
第三号	36,000	24,378	1,192	10,430
第四号	30,000	24,193	1,049	4,758
第五号	28,000	23,501	927	3,572
合　計	173,000	138,605	6,119	28,276

備考　上記の数値は，冨山房会計主任高濱貞治の報告によれば「倉庫出入調」である（早稲田大学中央図書館所蔵の「大隈文書」A4697「新日本部数調書」年月欠による）．

創刊当初の部数は表 10 に明白であるが，その一年後の状態は『新日本』編輯室からの報告によれば，こうである（注 73）．

> 本誌創刊以来，盛んなる世間の歓迎を受け，忽ちにして都下雑誌界第一の発行高を有するに至りたるは，記者のむしろ意想外に感ずるところ，従来一挙にして十万以上の読者を得たるは殆んどその例を聞かず，しかも一年後の今日に至りて盛況これに二倍し三倍せんとする勢いあるは記者の喜悦に耐えざるところなり．

このような「盛況」なる状態は，ほぼ大隈内閣の後半期ごろまでつづくと思われるが，それは状況証拠的な推測でしかない．そのころの調査と考えられる後藤新平資料「雑誌創立に対する愚見」によると（注 74），雑誌に「重きを置き出来る丈け良好のもの［を］なし大規模に経営」することは，「一大難事」である．収支として「相償はしむるには四五種の雑誌を同時に経営せざるべからず」，しかも，これを「独立の事業」として経営しようとすれば，すくなくとも 10 万円の資本と 4，5 年の歳月を必要とする，という．

この資料によれば，そのころの『新日本』は売れ行き「五千部位」にすぎなく，一般に「失敗」とみなされていたことがわかる．同時期の『実業之日本』は最盛期は 12~3 万部であったものが，いまや 7 万部ぐらいの発行で，『日本及日本人』は「真面目の読者」をえて発行部数 1 万 2～3 千であった．

その意味からいうと，今日，従来のような「実業雑誌」に満足することができず，「着実の読物の顕はるるを望み居る時勢」に移りつつあると見定めていた．しかし，そのような「着実なる好個の雑誌」を出版するようなところはないのも事実であったのである．

(7) 康次郎は経営状態の悪化を改善すべく，さまざまで手をうって経営努力をしていたと思われる．それは論文の執筆者構成だけでなく，岡本一平を多用したり，表紙裏の広告を書籍広告から「建物興産合資会社」のものに変更したり（康次郎の新しい眼を感じさせる広告である！），雑誌『中央公論』に倣うがごとくに通しページから分野別ページにしたり，雑誌『外交』を吸収合併したりしている．

しかし，17 年夏から秋にかけて，編集者が二回ほど立てつづけに変更になっているのはあきらかに，早稲田騒動の影響であろう．しかも，17 年 10 月には，表 6 で表記したように大隈が主筆を辞任，それに随伴するようにして主任編集者の相馬由也も進退を同じくしている．

資料 8　岡本一平が揶揄する早稲田騒動漫画

備考『新日本』1917 年 12 月号，3 ページ．

『新日本』の 17 年 11 月号で，反高田早苗派つまり天野為之派重鎮の元教授，伊藤重治郎が論考「本邦私学難問の代表としての早大騒擾」を寄せ，それを掲載したことに象徴されるように，雑誌『新日本』の立場は天野派に与していたと解釈してよい．

このような早稲田騒動以後の『新日本』は早稲田騒動を契機にして，しだいに高田早苗派＝早稲田本流から離れ，いっそう経営基盤を脆弱にし，早稲田本流派からの論陣を張ることをむずかしくしたといえる．

(8) だが，康次郎の視線はその後，従来の拠点と立場にとらわれることなく，早稲田派から離れたところで新しい事業分野と実業展開に注がれるようになったと思われる．その新しいヒントは『新日本』の，政治論考のなかにではなく，それとは異質で，新しい刺激をうけるような実業家の論考に存在したのである．

それらの論考は表 6 に明記した．なかでも，いちばん重視されるべき論考は 16 年 12 月号の野澤源次郎「株式熱より土地熱へ」と神田駿吉「田園都市問題」である．とくに前者の野澤は

1864年生まれ，慶応義塾を卒業後（1882年），貿易商として野澤組をかまえ，東京織布株式会社取締役でもあった（注75）．野澤は，談話記事のなかで強調する（注76）．

> 投資の目的として，土地を購入するのが最も賢い方法であるとして，さて夫れでは如何なる地点を購入するのが可いかといふことは，次に起つて来る問題である．之に就いて新聞雑誌などに散見する諸家の説を読んで観ると，或は千駄谷とか，渋谷，大塚，目白，目黒，田端，巣鴨といふやうな所が数へ挙げられて居るが，これ等は最早既成の土地であつて，其の地価も或る程度まで充分昂つて居る．将来に於て購入するとすれば，斯の如き既に他人の鋤犂が入つて居る所よりも未だ多く他人の顧みない処女地に目を着けることが必要である．それには稍市街から遠ざかつた例へば北多摩郡とか，更に離れては鉄道を利用して四五時間で行ける位の地点にまで其の視野を拡げる必要があるだらう，近頃盛に起つて来た田園都市熱の如き，偶ま吾人の所説と並行せるものとして観るべきである．
>
> 私共は信州の軽井沢に百万坪ばかりの土地を持て居るが此の軽井沢などは，今云ふ田園都市の候補地として誠に適合した所で，土地も高燥であり，空気もよく，値の如きも非常に廉く，普通五六十銭から一円内外二円までゞ，一坪の地が買へる，然し私が軽井沢を褒めるといふことは，自画自賛に類するから多くは云はない．只こゝには資本運用の手段方法として，土地購入が最も有利であり確実であることを主張するに止める．

この談話記事は，康次郎が新生『新日本』の社長に就任することが決定した直後のものである．これを誰が記事にしたのかは判然としないものの（いや康次郎が仲介役であったとも考えられないこともないが），それにしても，旧来の紙面にほとんど登載されることがなかった主題の素材で，来るべき紙面の経営を一任されていた康次郎の眼にとって，その談話記事は新鮮このうえなく，いっそう焼き付いた記事であった可能性がある．

それほどに，のちの康次郎の事業展開を思うと，野澤のこの談話記事はきわめて重要性をます．この談話の針路と方法をなぞるように，康次郎はその後，歩みはじめているからである．

野澤談話は康次郎にとって，土地への価値観や利用方法をめぐらす，いわばバイブルといえるような記事であったにちがいない．土地開発，あるいは軽井沢開発，箱根開発へとつらなる知恵袋としてあったといえる．

その意味でも，表6に『新日本』の特記事項として，康次郎の土地開発へのアイデアに影響をあたえたと思われる論考を数点掲載したのは，従来いわれているように永井柳太郎らの知識人の知識からだけではなく，実業者たちからの実践的な観察眼と投資方法の知恵にも影響をう

けたと思われたからである．

しかも，康次郎の事業経営の視線と方向性はこの野澤談話を契機として，土地をめぐる開発計画を模索，傾斜していったのではないかと考えられる．

だが，同時に考えなければいけないのは『新日本』第6巻4号（16年4月）掲載の岡田米蔵「将に起らんとする土地熱と最も見込ある米国の土地購入」論考である（表6参照，注77）．これは，大都市の土地利用と土地投資という経済性と有効性にたいして，具体的な例証を康次郎に最初にあたえた論考とも思われる．

康次郎は早稲田騒動以前の段階で，上記の野澤談話に注目したものの，当面は来る新生『新日本』の経営で手一杯であった．しかし，早稲田騒動をきっかけに，しだいに事業の方向を早稲田派＝高田早苗派とはちがうところを模索しはじめ，それは康次郎をして野澤談話の方向性＝土地開発へと傾斜させていったと理解することができる．

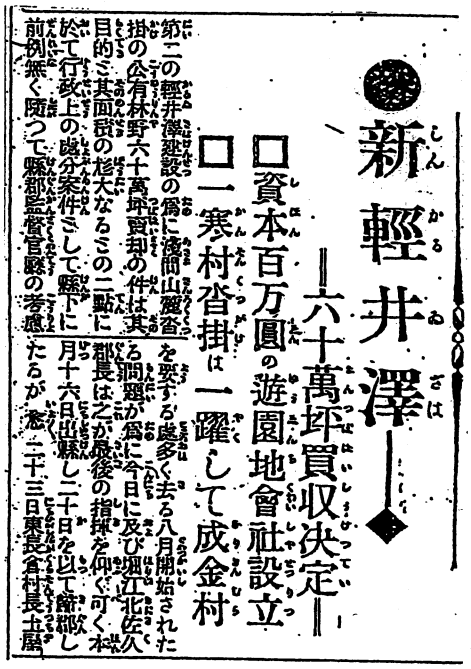
しかも康次郎の視線は早稲田騒動以後，早稲田本流派を離れた言論界にも視野を広げつつ，土地投資をめざす事業活動に本格的にそそがれた．つまり，従来とはちがう方向性と領域のなかで，康次郎が新たな人脈を形成していたと考えられるのは『新日本』18年の誌上で，近江の先輩である吉村鉄之助を紹介する記事「新江州商人の代表者」（7月号）と，藤田謙一を紹介する記事「屠龍の技，搏虎の略」（9月号）を掲載したことに明瞭にみてとれる（注78）．

早稲田派のいないところ――それは軽井沢であり，箱根であった．しかも，土地への愛着とこだわりは康次郎には人一倍あったからである．

おわりに
――『新日本』から軽井沢への転身にかけて――

雑誌『新日本』の経営は早稲田騒動後，好転するどころか，悪化の一途をたどっているようであった．それは，表6からも雑誌の体裁が一貫せず，そのあまりに不規則な，雑誌づくりの常道を逸脱してあがいているようにみえるからである．

そのような暗中模索のさなかの，1917年（大正6）の夏，康次郎は長野県東長倉村大字軽井沢に隣接する大字沓掛区有地の中字坂下，獅子岩一帯の高原で，東は湯川の清流にかぎられ，西は草津街道を境として面積60万坪，軽井沢より高く，海抜100尺，「飲料水の純良と眺望の絶佳なるとに於て附近に其比無き」を「発見」し，この地域が「避暑地」として適当であると判断した（注79）．


新輕井澤
六十萬坪買收決定
資本百万圓の遊園地會社設立
一寒村沓掛は一躍して成金村

資料9　堤康次郎の「新軽井沢」開発の新聞報道

備考『信濃毎日新聞』1917年12月25日，2面による．

表11　沓掛遊園地株式会社の役員（1917年末）

	生年	出身	学歴	役職
藤田謙一	1873	青森	明治法律学校94卒	台湾塩業会社専務取締役，斗六製糖 東洋製糖，東亜煙草，後藤毛織物 日韓印刷，千代田護謨取締役
堤康次郎	1887	滋賀	早稲田大学1913卒	千代田護謨専務取締役＊＊
森田退蔵	1866	埼玉	東京専門学校87卒	東京府農工銀行，扇町屋銀行取締役
中山佐市	1864	千葉	英吉利法律学校90卒	東京府農工銀行頭取，農工貯蓄銀行，門司興業取締役
岩本重四郎	1874	埼玉	慶応義塾正科96卒	農工貯蓄銀行常務取締役＊
辰巳　一	1857	石川	横須賀海軍造船専門学校77フランス留学　81帰朝/横須賀造船所1900佐世保海軍造船廠長	日本鋼鉄社長，千代田護謨取締役＊

備考　役員名と順序は『信濃毎日新聞』1917年12月25日（2面）にしたがったが，役職は『人事興信録』第四版（1915年1月）による．掲載がない場合は＊第五版（1918年9月），＊＊『新日本』1917年9月号（p.181）で補記し，『[中央大学] 学員名簿』（1971年，p.1425），『慶応義塾総覧』（1908年，p.183）も使用した．なお，堤康次郎の項が『人事興信録』に搭載されるのは第六版（1921年6月）からである．

このとき，誰と同道したかはわからない．しかし，この地を避暑地として開発することに共鳴した実業家の，誰かということになろうか．それは表11の，とくに藤田謙一の可能性が高

いかもしれない．藤田とは，康次郎はすでに千代田護謨会社をいっしょに経営する間柄であったからである．

このようにして，康次郎は17年12月23日，夏から交渉してきた沓掛地区60万坪の買収案件に許可がくだされ，安堵したのであろう．それは，あたかも雑誌『新日本』の将来性に暗澹たる気配を感ずるのと入れかわるように招来された情報であった．その意味では，康次郎は17年の夏，雑誌『新日本』の経営に手詰まり感を来たし，それを払拭するかのようにして，つぎなる事業への足がかりとして「新軽井沢」地区に行ったといえよう．

では，康次郎の土地開発計画の手法とはどのようであったのであろうか．わたくしの調査によれば，こうである．

鉄道がすでに敷設されている．この鉄道沿線を前提にして，康次郎の土地開発計画は開始される．その反対ではない．康次郎が当初，てがけはじめた手法はあくまでも鉄道沿線を利用しての，そのことを前提にしての土地開発であった．鉄道の敷設建設は莫大の資金を必要とし，康次郎が関与できるものではなかったからである．野澤談話の鉄則であったといえる．

すなわち土地開発，避暑地開発，郊外開発のほうは既設の鉄道を利用して，僅少の資金調達で経営できることが特徴である．弱小資本家に進出しやすかった手法であった．それが当面は，軽井沢に隣接する沓掛であったり，箱根湯本の延長線上の強羅，仙石原であった．とくに後者の箱根開発計画で注目すべきことは1919年6月1日の，箱根湯本から強羅までの登山鉄道の開通にあわせるように進出していることに，その典型をみる．

（注）

1　堤康次郎「私の履歴書」2回（『日本経済新聞』1956年7月30日）．
2　由井常彦編『堤康次郎』リブロポート，1996年．康次郎の伝記的事実関係は本書が決定版であるが，とくに断らないかぎり本書の記述によった．
3　同上，32ページ．
4　竹内洋『立身出世主義』増補版，世界思想社，2005年，144-145ページ．
5　前掲「私の履歴書」2回．
6　前掲「私の履歴書」4回（『日本経済新聞』1956年8月1日）．
7　前掲「私の履歴書」3回（『日本経済新聞』1956年7月31日）．康次郎が高等予科に入学したころの柔道部は早朝から道場をにぎわし「早稲田式の獰猛なる練習」をしていた（『早稲田学報』1909年4月号，16ページ）．最終学年の時期では部員は400余名，うち有段者30余名をかぞえ「日を逐ふて盛大に赴き」て，毎月一回の「例会」を開き「技術を錬磨し体育の助長」をはかったと報告されている（『早稲田学報』1912年10月号，23ページ．
8　同上．
9　堤康次郎「故郷の友え」（早稲田大学高等予科課目「作文」試験問題答案［「早稲田大学試験答案紙」使用］，『堤康次郎関係文書』No.6171，堤清二氏旧蔵資料）．読点と［　］は引用者がほどこし，〔　〕内の文言は作文担当教員の訂正である．

10 鉄鞭子「早稲田大学雄弁会月旦」(『雄弁』4巻7号，1912年，124ページ)．なお句読点は原文のままである．
11 安蔵秋月「早稲田雄弁会公開の回顧」(『雄弁』2巻5号，1911年，198ページ)．
12 芳賀榮造「早稲田大学雄弁会第四回地方巡回演説奮闘記」(『雄弁』3巻10号，1912年，107ページ)．
13 同上，108ページ．
14 同上，107ページ．
15 同上，113ページ．
16 同上，114ページ．
17 『新日本』2巻6号，1912年，67-73ページ．この号の巻頭には，大隈重信も「米価騰貴と細民の救済」を掲載した．
18 『香川新報』1912年7月17日，一面．
19 『新日本』4巻4号，1914年，201ページ．
20 前掲，鉄鞭子「早稲田大学雄弁会月旦」．人名には圏点がついているが，引用では省略した．
21 八十年史編集委員会編『早稲田大学雄弁会八十年史』雄弁会OB会，1983年，45ページ．
22 『大阪朝日新聞』1912年5月14日六面欄外記事「中橋徳五郎君推薦大演説会」によると，「其他名士数名」とあるので，そのなかにふくまれていたのであろう．
23 中保与作『永井柳太郎』同編纂会，1959年，8ページ．
24 各県に支部設置準備委員ができるが，東京では蔵原惟郭，松下軍治，山梨は根津嘉一郎，兵庫は小寺謙吉，高知は片岡直温が名をつらねる（「立憲同志会関係」資料『後藤新平関係文書』R47，国立国会図書館所蔵マイクロフィルム版）．
25 『東京朝日新聞』1913年1月31日，2面．
26 同上，1913年1月30日，2面．
27 中野正剛「新首相桂太郎論」(『新日本』3巻2号，1913年，127-134ページ)．
28 『早稲田学報』1913年8月号，8ページ．
29 同上，1913年9月号，19-20ページ．
30 同上，1914年2月号，20ページ．
31 前掲『堤康次郎』，51，61ページ．
32 筑井正義『堤康次郎伝』東洋書館，1955年，47-48ページ．なお，引用文中の「神田のニコライ堂にいた日本一のロシア通」について，澤田和彦氏のご教示によれば，ニコライ神学校出身でロシア文学者として膨大な翻訳を残した昇曙夢（のぼり・しょむ），ニコライ神学校長をつとめた瀬沼恪三郎（せぬま・かくさぶろう），日本ハリスト正教会の三井道郎（みい・みちお），このあたりかもしれないという．
33 前掲『堤康次郎』，63ページ．
34 堤康次郎『日露財政比較論』博文館，1914年，7-8ページ．
35 同上，228ページ．この部分を引用し，『早稲田学報』1915年7月号は本書が「大に我が国民の自覚警醒を促がし，将来六千万同胞の全力を注いで努力奮闘すべきは我が経済力の発達増進にあるべきを警告した熱血文字たり」と紹介した（24ページ）．
36 同上，229ページ．この引用文全体に強調の傍点がつけられているが省略した．
37 本書の「参考書」一覧に，鈴陽生「露国の財政及外交」(『政友』第165，167号，1914年3~4月）が記載されていないのは掲載誌が政友会の機関誌であったためであろうか．なお表2資料を収集するにあたっては東京外国語大学附属図書館，所蔵図書の閲覧や借用では早稲田大学中央図書館，神戸大学附属図書館（社会科学系図書館），筑波大学附属図書館（中央図書館），東京大学理学部図書室および経済学部図書館にお世話になった．
38 前掲『日露財政比較論』，「自序」9ページ．
39 関西学院高等学部商科会雑誌『商光』1919年3月15日号，146ページ．本文献と注40の文書資料を関西学

院学院史編纂室の高木久留美氏にご教示していただいた．なお生年は注40の文書中からである．

40 関西学院所蔵文書による．なお逝去日は『神戸又新日報』1918年11月15日，八面．

41 前掲『商光』．

42 『読売新聞』1911年8月7日，二面．

43 永井柳太郎訳『英国殖民発達史』早稲田大学出版部，1909年，「序言」4ページ．

44 後藤新平原稿「日露親善論」（前掲『後藤新平関係文書』R64，24-2-2）．年月が欠落しているが文中に「昨大正四年以降」とあることから，大正五年（1915）とした．

45 浮田和民「露西亜と日本との比較研究」其一（『太陽』1911年7月号，1ページ）．其二は次号（1911年8月号）に掲載された．

46 後藤新平原稿「公民同盟会に於ける挨拶（腹案）」（前掲『後藤新平関係文書』R68，24-31-3）．文中の（　）は原文のまま，［　］は引用者がほどこした．文書筆跡鑑定と解読にあたってはとくに佐々木隆氏をわずらわした．

47 前掲『後藤新平関係文書』R73，30-4-2．このパンフレットはその後，後藤の著書『自治生活の新生活』にも全文が所収された（同上文書，30-4-1）．

48 『横浜貿易新報』1913年11月2日，二面．

49 『京都日出新聞』1915年3月15日（三面）によれば，康次郎の肩書きは「大隈伯後援会本部公民会同盟会主」（原文のママ）と紹介されて，公民同盟「会主」であることが確認できる．

50 前掲『堤康次郎』，67ページから再引用．

51 『読売新聞』1915年2月14日，三面．

52 『新日本』1915年5月号，48-49ページ．ただし，左の文献で大隈伯後援会全国大会の日付は1月12日となっているのが，次号で1月18日と訂正された（162ページ）．

53 同上，1915年2月号，12ページ．

54 同上，19ページ．引用文は22-23ページで，政友会と大隈の文字には強意の印がついているが省略した．

55 前掲『堤康次郎』，62ページ．

56 『大阪朝日新聞』1915年2月27日，三面．

57 『鳥取新報』1915年3月3日，二面．本資料，表5の典拠になっている『山陰日日新聞』，『因伯時報』の収集にあたっては鳥取県立図書館の渡辺仁美氏にご協力をえた．

58 『山陰日日新聞』1915年3月5日，二面．

59 同上，1915年3月2日，二面．

60 『神戸又新日報』1915年3月2日，二面．

61 『山陰新聞』1915年3月5日（第二版），二面．

62 『東京朝日新聞』1915年3月28日，二面．

63 『京都日出新聞』1915年2月19日，三面．

64 98ページ．

65 前掲『堤康次郎』，73-74ページ．

66 101ページ．

67 『新日本』第6巻12月号，1916年12月，この「社告」は160-161ページ間に挿入された紙面である．

68 雑誌『新日本』の原本所蔵確認は，早稲田大学中央図書館，東京大学法学部附属近代法政史料センター明治新聞雑誌文庫，国立国会図書館であたった．とくに印象的であったのは，

69 『新日本』創刊号（1911年4月），「『新日本』編輯顧問会議」（巻頭部分，ページ数なし）．なお創刊時の顧問は青山胤通，有賀長雄，加藤弘之，阪谷芳郎，櫻井錠二，澤柳政太郎，渋澤榮一，坪内雄蔵，坪井九馬三，富井政章，横井時敬，渡邊渡，の12名であった．

70 前掲『堤康次郎伝』，40ページ．

71 同上，41ページ．

72 国立国会図書館所蔵本で，同館のご協力で測定した．

73 『新日本』1912年4月号，271ページ．

74 後藤新平稿「雑誌創立に対する愚見」(前掲『後藤新平関係文書』R68，26-38)．

75 「野澤源次郎」(『人事興信録』第五版，人事興信所，1918年9月，の之部，の20ページ)．

76 『新日本』1916年12月号，123ページ．

77 岡本米蔵は1904年（明治37)，東京高等商業学校を卒業後，ニューヨークに渡り，12年1月，博文館から紐育土地建物株式会社長として『紐育市内之地所』(134ページ）を刊行（16年1月再版)，『修学行商日記』『商工界の七十日』などの著作もある．

78 吉村の紹介記事が長門三郎「新江州商人の代表者——電気界の英雄吉村鉄之助——」で，藤田の紹介記事は音羽九郎「屠龍の技，搏虎の略——財界の奇才藤田謙一——」で，いずれの記事執筆者名も，実名というよりは筆名らしく感じられる．それは，おそらく康次郎が執筆し，紹介した記事かもしれない．

79 『信濃毎日新聞』1917年12月25日，二面．

〔付記〕本稿は，堤清二氏所蔵文書「堤康次郎関係文書」がなければ，けっして生まれなかったものである．しかも，同文書研究会を組織した大西健夫氏，それに加わるように慫慂くださった佐藤能丸氏，その会で初期康次郎に「空白」が多く事実にもとづいて論ずる必要があるとの発表をされた野田正穂氏，大和加寿子さん，高木久留美さん，渡辺仁美さん，佐々木隆氏，小川糸子さん，磯野直秀氏，澤田和彦氏，そして文書所蔵者の堤清二氏に，この場をかりて感謝したい．

本稿が完成したら，二宮宏之氏にお送りするつもりであった．だが，この3月13日に逝去されてしまった（“Le Monde” 2006/03/23，p.29)．残念でならない．学恩に感謝しつつ，ご冥福を祈る．

英文タイトルはM. William Steleさん，要旨はD. Steven Radovanさん，Laura O'Loughlinさん，Housam Darwishehさんのご協力をえた．

なお，上記研究会の成果は大西健夫・齋藤憲・川口浩編『堤康次郎と西武グループの形成』(知泉書館，2006年3月）として出版され，その第2章に本稿を改稿，簡約するかたちで収載されている．

〔訂正増補〕本稿の前号（上）215ページで，堤康次郎が早稲田大学の高等予科に入学したのは「〔19〕09年4月」のこととした．だが，堤清二氏所蔵の学籍簿文書（高等予科）によれば康次郎は09年（明治40）3月に試験合格し，27日に学費納入，その翌日付（28日）で政治科「入学」となっているので，その旨を記し，訂正増補とする．

The Young Tsutsumi Yasujiro: From Publisher to Land Developer

UTSUMI Takashi

The author focuses on the life of Tsutsumi Yasujiro during the period 1909–18, founder of the Seibu Railway Co. group, and chairman of the Lower House from 1953 to 1954.

Yasujiro (1889–1964) came to Tokyo from Shiga Prefecture to study at Waseda University in 1909. After graduating in 1913, he worked for five years as a writer and editor in Tokyo. The specific details of Yasujiro's youth, however, remained unclear.

The purpose of this paper is to examine how Yasujiro spent his youth, and to provide concrete evidence of his activities. The third purpose is to consider his role in the formation of modern Japanese industry. Yasujiro intended to be a politician. Before reaching that goal, however, he had to work to establish himself financially.

In conclusion, this paper establishes four major points.

Firstly, during his time as a university student, he joined a political activist group. While in this group he gave speeches and informed not only students but many others about current happenings in the political and economic worlds. This paper will make clear exactly what he discussed and spoke about whilst in the above-mentioned group.

Secondly, in 1914 he published a book entitled "Nichiro Zaisei Hikakuron (Comparative Financial Systems between Japan and Russia)." However, were it not for his friend Mr. Kourogi Mokutaro 's support, it would not have been possible for Yasujiro to publish his book.

Thirdly, based on the ideas in the pamphlet "The Hansa of 1909", Nagai Ryutaro created the political group Koumindomeikai. Even though Nagai was the creator of Koumindomeikai, it was Yasujiro who carried out the ideas of the group.

Afterwards, Yasujiro became the president of the magazine "Shin Nippon (*)." In the magazine he began incorporating leftist ideas. However, the magazine started to do poorly. While managing the magazine he read many of the articles , finding himself influenced by two in particular. One expressed that rather than investing in stocks, one should buy land and develop it. Compared to stock there was much less risk and just as great potential for profit.

He consequently established his land development business in 1917.

(*)While the Japanese title of this publication should be read 'Shin Nihon' in Japanese on the frontcover page of 1 volume 1 (1911), the reading 'Shin Nippon' can be found in English on the back cover of 2 volume 4 (1912), which is assumed to be the correct reading.